

第5章 逸脱行動と学校生活

近年、不登校、いじめ、校内暴力や授業が成りたちにくい状況の進行等が、学校教育における病的現象という枠組みを超えて、社会問題として教育の場に関わる人々以外の人々をも大きく巻き込んだ形で議論されるようになってきた。世紀末には、14歳から19歳の少年による事件が多発した。これらの問題を根本的に打開していくためには、さまざまな逸脱行動の実態や背景、さらにはその形成要因を明らかにすることがもとめられよう。本章では逸脱行動と学校生活との関係に焦点化して調査結果をみていく。

第1節 逸脱行動と授業理解度、学業成績、進学アスピレーション

(1) 逸脱行動と授業理解度

まず、高校生は日々の授業をどのくらい理解していると自己認識しているかを、表5-1「学校の授業の理解度」で見てみよう。

表5-1は、授業について「ほとんど理解している」「まあまあ理解している」「あまり理解できない」「全く理解できない」の4段階でたずねた結果である。便宜上、表中では、前者の「ほとんど理解している」と「まあまあ理解している」の合計を「理解できる」、後者の「あまり理解できない」と「全く理解できない」の合計を「理解できない」にまとめ、それぞれの数値を太字（以下、表中での表示は同様）で示している。

高校生全体（N=2129人）では、「ほとんど理解している」と答えた生徒は4.0%と非常に少ないものの、「まあまあ理解している」は53.3%に達し、両者を合計すると、6割近く（57.3%）が「授業を理解している」と回答した。その一方で「あまり理解できない」は34.3%、「全く理解できない」は8.4%で、合わせて「理解できない」と答えた生徒は4割（42.7%）となる。全体では、3：2で「理解できる」が「理解できない」を上回っている。

この3：2の比率に性差はほとんどみられない（男子57.3%：42.7%、女子55.5%：44.5%）。

表5-1 学校の授業の理解度(%)

N=2129人

	理解している	ほとんど理解している	まあまあ理解している	理解できない	あまり理解できない	全く理解できない
全体	57.3	4.0	53.3	42.7	34.3	8.4
男	59.1	5.7	53.4	40.9	32.1	8.8
女	55.5	2.5	53.0	44.5	36.7	7.8

男=1017人 女=1094人

それでは、この授業理解度と大学進学率との関係はどうだろうか(表5-2)。なお、「大学進学率」は、AからDの4ランクに分けている。進学率が最も高い高校グループをA、最も低い高校グループをDとする。

大学進学率が最も高いAランク校では、「理解している」（「ほとんど理解している」+「まあまあ理解している」）と答えた生徒は6割(65.0%)を大きく上回っているが、Bランク校は57.4%、

C ランク校は 52.2%、大学進学率が最も低い D ランクは、54.4%であり、B、D、C の順で下降傾向がみられる。最も高い A ランク校と最も低い C ランク校の差はおよそ 13 ポイントある。

特に、「全く理解できない」と答えた生徒については、A ランクは 4.9%と極めて少ないが、C ランク校(9.2%)と D ランク校 (10.9%) では 1 割に達している。大学進学率が低い高校には、10 人に 1 人の割で、「授業に全くついていけない」という深刻な学業不振状況に陥っている生徒が存在することが浮き彫りにされたと言えよう。

表 5-2 学校の授業の理解度 × 大学進学率(%)

N=2129 人

	理解している	ほとんど理解している	まあまあ理解している	理解できない	あまり理解できない	全く理解できない
全体	57.3	4.0	53.3	42.7	34.3	8.4
A	65.0	7.4	57.6	35.0	30.1	4.9
B	57.4	3.3	54.1	42.6	34.0	8.5
C	52.2	1.8	50.3	47.8	38.6	9.2
D	54.4	4.0	50.4	45.6	34.7	10.9

A=448 人 B=796 人 C=435 人 D=450 人 ランク : A>B>C>D

p=.000

学校立地と理解度の関係も見てみよう (表 5-3)。

全体で「授業を理解している」に限定してみると、「都心」にある高校 (54.9%) よりも「その他」の高校(58.6%)の方が「理解している」と答えた割合は高い。性別でみると、「理解している」は、男子の方が女子より理解度は高い。また、男女ともに「都心」(男子 56.8%、女子 51.8%)より「その他」(男子 60.6%、女子 57.2%)のほうが 5 ポイント前後高くなっている。

表 5-3 授業の理解度×学校立地 (%)

N=2129 人

	理解している	ほとんど理解している	まあまあ理解している	理解できない	あまり理解できない	全く理解できない
全体	57.3	4.0	53.3	42.7	34.3	8.4
都心	54.9	5.3	49.5	45.1	34.9	10.3
その他	58.6	3.3	55.4	41.4	34.0	7.4
都心 男子	56.8	7.5	49.2	43.2	31.7	11.6
都心 女子	51.8	2.9	48.8	48.2	40.0	8.2
その他男子	60.6	4.5	56.1	39.4	32.3	7.1
その他女子	57.2	2.3	54.9	42.8	35.3	7.6

都心=751 人 その他=1378 人

p=.004

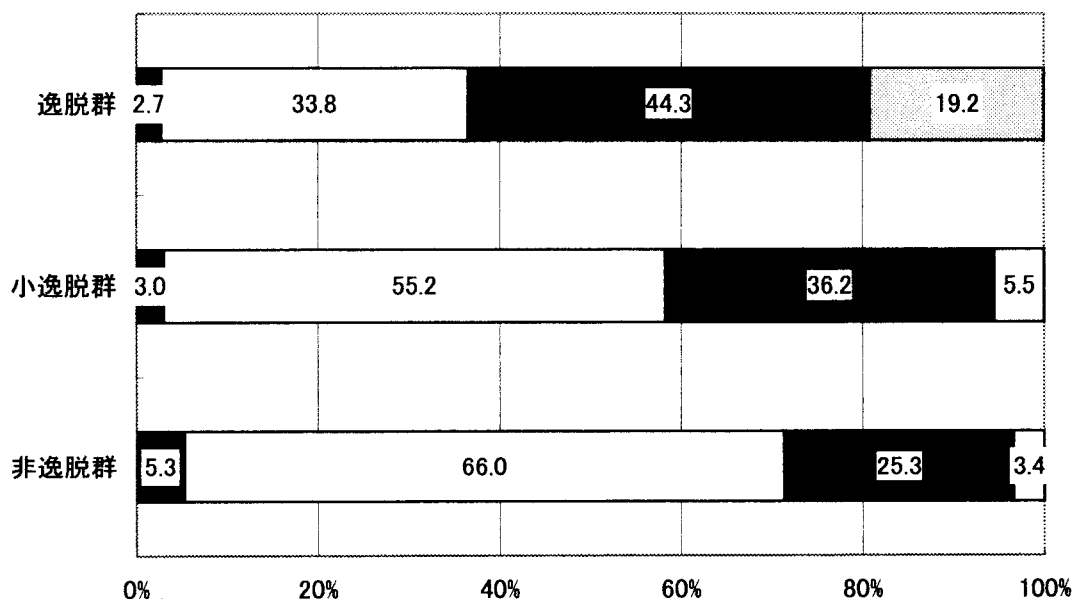
さて、第 4 章で逸脱行動と家庭環境等との関連を見てきたが、逸脱行動は、授業理解度にどのような影響を及ぼしているのだろうか。図 5-1 「授業理解度 X 逸脱度変数 1」により、逸脱行動と授業との関係を見てみたい。図 5-1 により、「理解している」(ほとんど+まあまあ理解できる)と「理解できない」(あまり+全く理解できない)に着目してみると、非逸脱群(N=766 人)は 7 : 3、小逸脱群 (N=671 人) は 6 : 4、逸脱群 (N=554 人) は 4 : 6 となり、逸脱度

が大きくなると理解度の比率の逆転が見られる。

因みに、規範意識と授業理解との関係にも触れてみよう（図5-2）。「理解できない」に着目すると、高規範群は、「理解できない」の比率は3割だが、低規範群は高規範群の2倍の6割に及んでいる。規範意識と授業理解の関係においても、逸脱行動と同様の結果が得られたといえよう。

「授業が理解できる」高校生は6割、「授業が理解できない」高校生は4割いる。そして、大きく逸脱した行動をとっている高校生（逸脱群）の6割が「理解できない」という深刻な学業不振に陥っているが、逸脱した行動をとらない高校生（非逸脱群）では「理解できない」は3割以下であり、逸脱群と非逸脱群の差は顕著であり、大きく逸脱した行動をとっている者ほど授業理解が充分でない状態にある。高校生の授業理解度は、逸脱行動との明らかな相関が見られるといえよう。

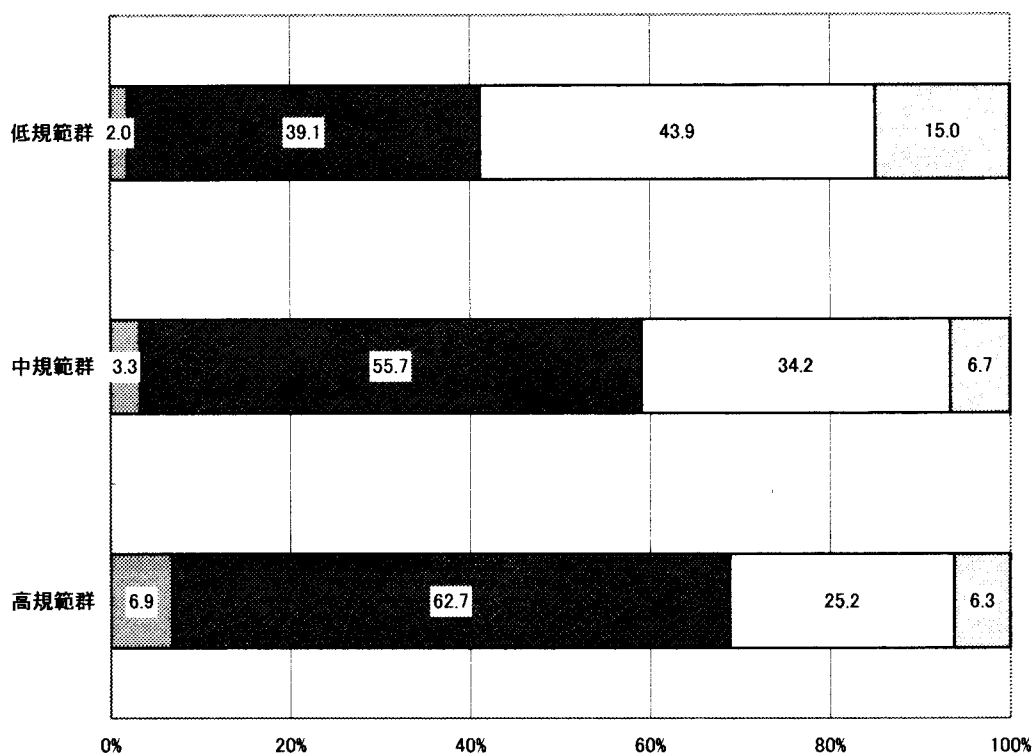
図5-1 授業の理解度×逸脱度変数1



	非逸脱群	小逸脱群	逸脱群
□ 全く理解できない	3.4	5.5	19.2
■ あまり理解できない	25.3	36.2	44.3
□ まあまあ理解している	66.0	55.2	33.8
■ ほとんど理解している	5.3	3.0	2.7

図5-2 授業の理解度×規範意識

■ほとんど理解している ■まあまあ理解している □あまり理解できない □全く理解できない



	高規範群	中規範群	低規範群
□全く理解できない	6.3	6.7	15.0
□あまり理解できない	25.2	34.2	43.9
■まあまあ理解している	62.7	55.7	39.1
■ほとんど理解している	6.9	3.3	2.0

(2) 逸脱行動と学業成績

次に学業成績についてみてみよう。逸脱行動は成績にどのような影響をもたらすのだろうか。

表5-4「クラスの成績」は、高校生にクラス内での成績を「上の方」「まん中より少し上の方」「まん中くらい」「まん中より少し下」「下の方」の5段階で自己評価してもらった結果である。なお、便宜上、上位2つを合計し「上の方」（「上の方」+「まん中より少し上の方」）、下位2つを合計し「下の方」（「まん中より少し下」+「下の方」）として太字表示した。

全体（N=2130人）としては、「上の方」は13.2%、「まん中より少し上の方」は20.7%、「まん中くらい」は25.7%、「まん中より少し下」は19.1%、「下の方」は21.3%とほぼ2割前後で5分割されている。

上中下の3段階でみると、「上の方」は33.9%、「まん中」は25.7%、「下の方」という自己評価は40.4%で、概ね3：3：4となり、「下の方」がやや多い分布である。

表5-4 クラスの中の成績 (%)

N=2130 人

	上の方	上の方	まん中より 少し上の方	まん中くらい	下の方	まん中より 少し下	下の方
全体	33.9	13.2	20.7	25.7	40.4	19.1	21.3
男	35.1	13.9	21.1	23.2	41.7	18.3	23.5
女	32.9	12.7	20.2	28.2	38.8	19.8	19.0

男=1018人 女=1094人

表5-5の大学進学率に基づいた高校4群別でも、この成績上中下3段階の割合には有意な差はみられない。つまり、Aランクの高校にもDランクの高校にも上位者は3割いるという結果である。また、表5-6「学校立地別」でも、上中下3段階の割合は「都心」も「その他」にも有意な差はない。

表5-5 クラスの中の成績×大学進学率(%)

N=2130 人

	上の方	上の方	まん中より 少し上の方	まん中くらい	下の方	まん中より 少し下	下の方
全体	33.9	13.2	20.7	25.7	40.4	19.1	21.3
A	33.6	13.4	20.3	24.7	41.6	18.5	23.2
B	32.9	11.4	21.5	28.4	38.8	18.9	19.8
C	32.6	13.8	18.9	24.8	42.5	20.7	21.8
D	37.2	15.8	21.4	22.9	39.9	18.5	21.4

A=449人 B=797人 C=435人 D=449人 ランク:A>B>C>D

p=.477

表5-6 クラスの中の成績×学校立地(%)

N=2130 人

	上の方	上の方	まん中より少 し上の方	まん中くらい	下の方	まん中より少 し下	下の方
全体	33.9	13.2	20.7	25.7	40.4	19.1	21.3
都心	34.6	14.4	20.2	24.4	41.0	19.4	21.6
その他	33.5	12.6	20.9	26.4	40.0	19.0	21.1

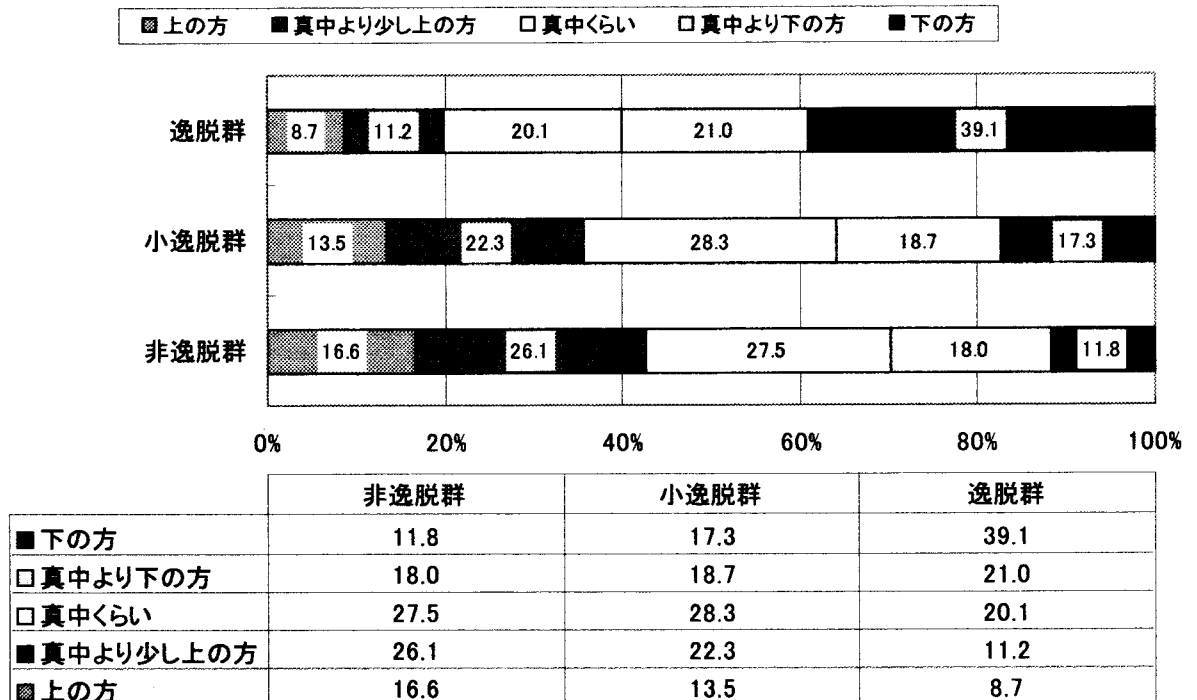
都心=749人 その他=1381人

p=.696

それでは、逸脱行動と成績との関係はどうだろうか。

図5-3「成績×逸脱度変数1」により、「上の方」についてみると、非逸脱群では4割強(42.7%)を占めているが、小逸脱群は4割弱(35.8%)に、逸脱群は2割弱(19.9%)となり、成績上位者はさらに少なくなっている。逆に、「下の方」は、非逸脱群では3割弱(29.8%)だが、逸脱群では2倍の6割(60.0%)に及んでいる。非逸脱群の上位者は逸脱群の2倍、下位者は2分の1である。つまり、非逸脱群は上位者に多く、逸脱群は下位者に多いという結果である。非逸脱群と逸脱群のクラス内での成績の差異は瞭然として明らかである。逸脱行動がクラス内の成績にも影響を及ぼしている。

図5-3 クラスの中の成績×逸脱度変数1



(3) 逸脱行動と進学アスピレーション

ところで、現代の高校生は卒業後の進路計画をどのように描いているのだろうか。表5-7「最終進路希望」は、学校段階を6段階（中学校、高等学校、専門学校、短期大学・高等専門学校・4年制大学、大学院）でたずね、進路結果を集計したものである。

本調査の高校生(N=2117人)の希望を高い順に示すと、4年制大学(55.9%)、専門学校(19.0%)、高等学校(10.3%)、短期大学・高等専門学校(7.9%)、大学院(6.6%)、中学校(0.2%)となる。4年制大学以上の進学希望は62.5%である。短大を含むと4年制大学以上は7割(70.4%)とさらに高くなる。因みに、文部省(現在文部科学省)による2000年度『学校基本調査速報』¹⁾によると、高校卒業者のうち現役で大学や短大に進学した者は45.1%であった。同調査によると、2000年度は大学等に志願したが行けなかった受験生は入学率81.7%で、5人に1人もいない²⁾。本調査データは、「進路希望」であることを考慮しなければならないが、この点を差し引いても、本調査対象者は高い進学アスピレーションを抱いていると言えよう。

表5-7 最終進路希望 (%) N=2099人 (男=1012人 女=1087人)

	中学校	高等学校	専門学校	短大・高等 専門学校	4年制大学	大学院
全体	0.2	10.3	19.0	7.9	55.9	6.6
男	0.4	9.8	16.0	2.3	61.8	9.8
女	0.1	10.8	21.8	13.2	50.8	3.3

¹⁾文部省『学校基本調査速報』2000年。

²⁾『内外教育』2000年9月1日 時事通信、pp.4-11。

さて、この進学アスピレーションと逸脱行動との関係をみてみよう（図5-4）。

逸脱行動3群のどの群においても、最も高い最終進路希望は4年制大学である。4年制大学については、非逸脱群（61.5%）と小逸脱群（58.3%）との差は小さく、両群とも60%前後の者が希望しているが、逸脱群は45.1%と4年制進学希望率は大きく減少する。その落ち込みは、高等学校（14.4%）と専修学校（28.6%）に振り分けられ、それぞれの割合が非逸脱群（高等学校7.3%、専修学校14.2%）の2倍になっている。

規範意識3群と進学アスピレーションについてもみておこう（図5-5）。高規範群（59.0%）に比べて低規範群の大学希望（54.2%）は減少し、高等学校と専門学校希望が増えるという、逸脱行動と類似した傾向が認められる。しかし、どの学校段階においても、高規範群と低規範群の差は、非逸脱群と逸脱群の差よりも小さい。

最終進路希望は、逸脱度が上がると、大学希望は減少し、高等学校と専門学校を希望する割合が増加する。また、規範意識が低い者ほど大学希望は少なく、高等学校と専門学校を希望する割合が増加する。だが、規範意識の高低よりも逸脱行動の大小の方が、進学アスピレーションの加熱と冷却、あるいは上昇と下降に強い影響を及ぼしている。

以上みてきたように、本調査からは、逸脱した行動と授業理解・学業成績・進学アスピレーションとの相関が認められた。知識や技能の習得を担う陶冶的側面と道徳性や社会的態度の発達を担う訓育的側面は、常に学校の2つの主要な教育機能である。両者の相互関連やバランスの問題が人格形成に深く関わっていることがあらためて指摘されたといえよう。

図5-4 最終進路希望×逸脱度変数1

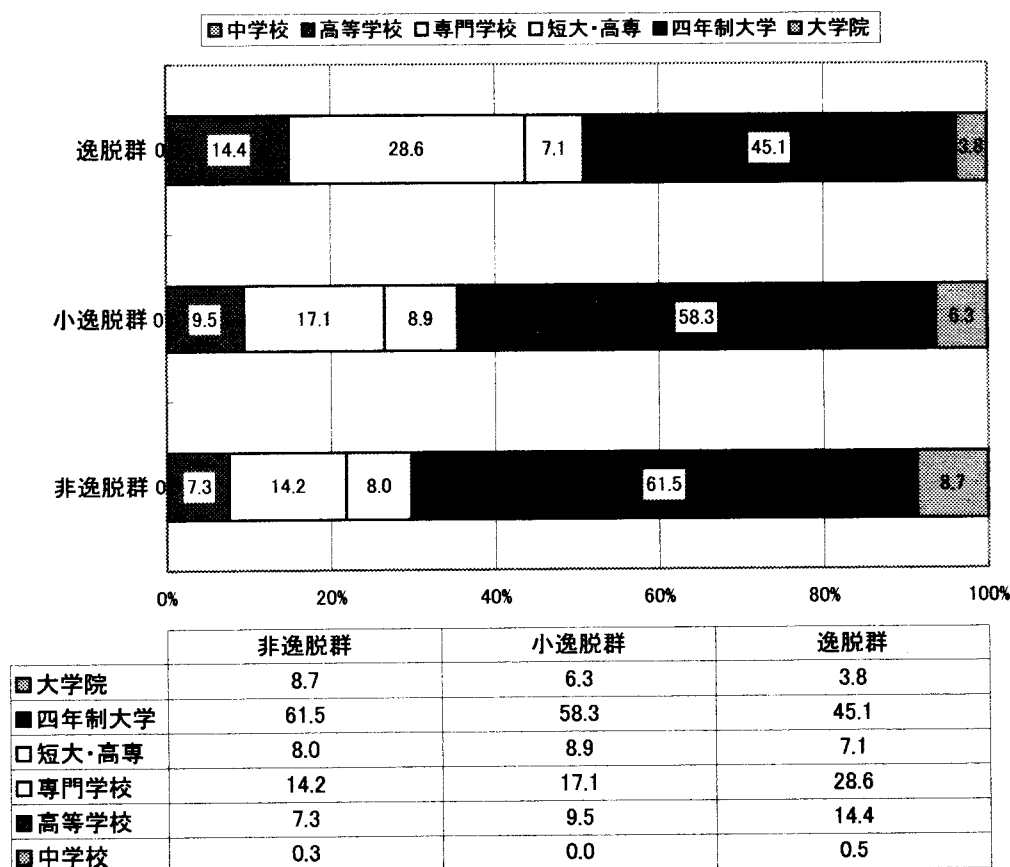
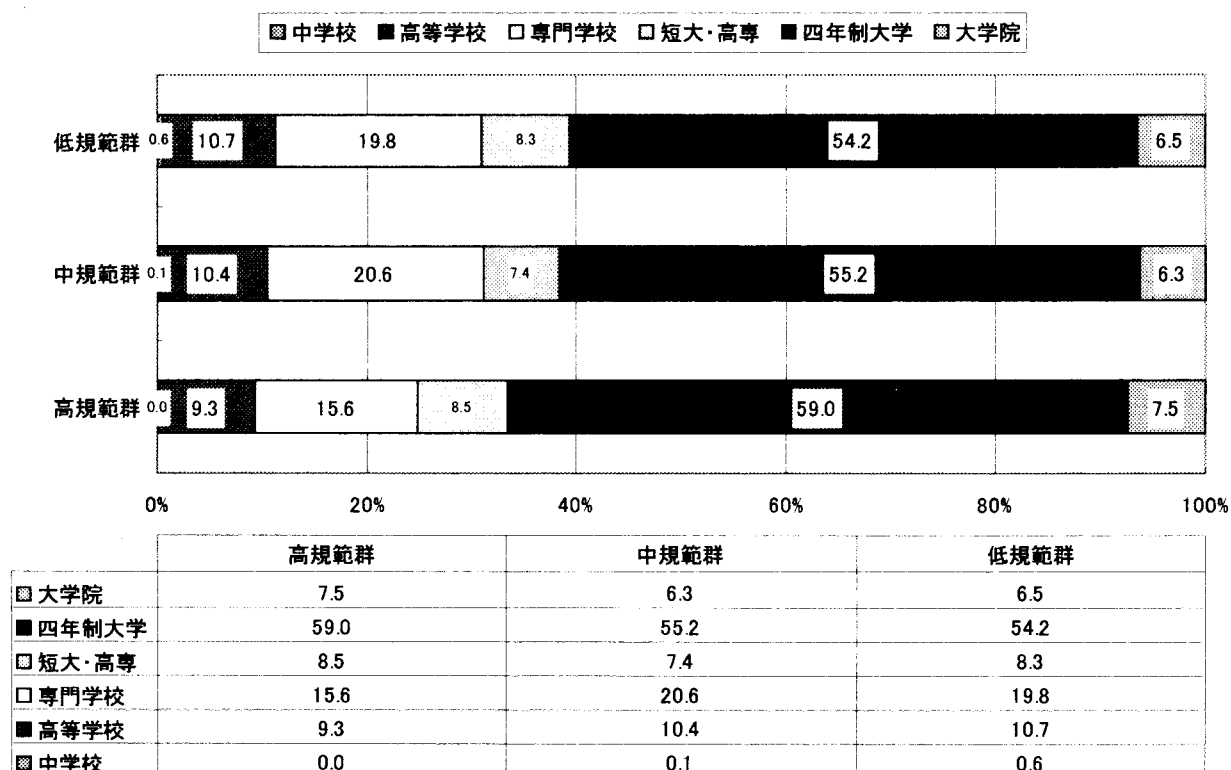


図5-5 最終進路希望×規範意識



第2節 逸脱行動と学校生活の満足度と不満

(1) 逸脱行動と学校生活の満足度

今、高校生は、日々の学校生活にどれくらい満足感をもって暮らしているのだろうか。

ここでは、逸脱行動と学校生活の満足度との関係、あわせて、学校生活での不満はどのようなことに起因するかを明らかにしたい。

表5-8「学校生活の満足度」は、高校生(N=2131人)の学校生活での満足感を4段階でたずねた結果である。それによると、16.3%が「満足」、42.7%が「やや満足」、28.3%が「やや不満」、12.7%が「不満」と回答している。「満足」と「やや満足」を合算すると「満足」派は6割(59.0%)、「やや不満」と「不満」を合算すると「不満」派は4割となり、学校生活満足派の方が多数派ということになる。

表5-8 学校生活の満足度(%) N=2131人 (男=1018人 女=1095人)

	満足	満足	やや満足	不満	やや不満	不満
全体	59.0	16.3	42.7	41.0	28.3	12.7
男	57.1	16.2	40.9	42.9	29.9	13.1
女	61.0	16.4	44.6	39.0	26.8	12.1